

令和元年7月1日発行 春燈/第74巻第7号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

# 春燈

2019 July

7  
月号



主宰の句

安立公彦

語るかに青空を舞ふ落花かな

仏徒われにやさしさ賜ふ彩卵

罅走る左千夫の墓や春しぐれ

(亀戸普門院)

荷風忌を明日に春ゆく隅田川

長老の手並に揃ふ菖蒲酒



成瀬櫻桃子の句

亀鳴くや忘るるための酒利かず

『風色』昭和四十八年

亀を二十五年飼っているが「亀鳴く」の季語は難しく中々詠めないものである。師は四十四年にお母様を、二年后にお父様を亡くされた。

苦勞の多かつたお母様の事、幼くして別れへ縁うすくと詠まれたお父様との永遠の別れ、忘れてしまいたいと酒を飲んでも中々利いてこない、この切なさが胸に響く。

溝越教子

成瀬櫻桃子の句

炎天や口をつぐみし石地藏

「自註現代俳句シリーズ『成瀬桜桃子集』昭和五十二年

自註によれば昭和十七年の作。国語教師の故・堀徹先生に俳句を奨められ、初めて○印を貰った句。炎天下の地藏の素直な写生に思えるが、そうではない。言論出版の取締りがこの年に強化された。

原爆投下の広島は雲一つない炎天だった。終戦日は万太郎の「西日中」の句の通りだ。地藏菩薩はやがて来る炎天の日を悲しみ、口をつぐんだのかも知れない。

宮崎洋

# 燈下集



○ 鈴木静恵

羽繕ふ鳥の飛沫や風光る  
十戒を説く尼僧に桜散りにけり  
峠路の法師の宿や遅桜  
昨日の雨こぼし椿の落ちにけり  
新緑の風の誘ふ旅程かな

○ 鈴木直充

白湯のんで朝寝の床にもどりけり  
菜の花の朝のきいと夕べの黄  
地を掴みにはとり歩く穀雨かな  
花冷えの書齋はやばや灯しけり  
石庭の石呟けるおぼろかな

○ 高橋和女

南仏の明るき空やミモザ咲く  
夜もすがら春のニースのカーニバル

歴史たどる伊太利の旅春深し  
春の月仰ぎ旅愁の湧く夜かな

花衣に更へて帰宅の途につけり

○ 加藤良子

高齢者と児童の交流風光る

付添はスマートフォンや囁れり

若冲の五百羅漢や竹落葉

碇泊の白き小船や幟立つ

ばあば小さく五月五日の背くらべ

○ 柴崎甲武信

太郎恋ひ乙姫老ゆと亀鳴けり

世の隅の草樹にまぎれ座禪草

元冠の防塁長し黄砂降る

花吹雪闌くる戦艦大和の忌

田楽の串振り田園交響楽

○ 近藤牧男

どの風もみな新しく朝ざくら

朝に見て夕べに仰ぐさくらかな

夕ざくら橋のたもとといふところ

猫の子の気になつてゐる靴の紐

惜春や預かりかぬることひとつ

○ 吉澤恵美子

戦なきこのしあはせや桜満つ

逃水の武蔵野遠くなりしかな

春耕や伸ぶる青菜の莖三寸

凧あげて海辺の空をかきまはす

靴ぬいで浜辺を駆くる夏近し

○ ト部黎子

山内の祈りにけぶる藤の雨

音符めく句碑のいろはや雀の子

垣越しに滅紫ちりばめあげび咲く

土筆摘むいつも目路には母の背

春昼やターレの乾く魚市場

○ 卯木堯子

ルノワールの春の花束胸に抱く

白れんの白の際立つ薄暮かな

琴線に触るる花暦令和の世

まだ王子さまの夢見るチュウリップ

夕桜聖テレジアの優しさに

○ 深川敏子

真剣に子育ての頃豆の飯

簡潔な荷風の小説風光る

つくづくと夫亡き後や暮の春

濃淡のモノのむらさき菖蒲咲く

少しづつ癒ゆる喜び梅は実

○ 大室恵美子

令和なほ生くる大望亀鳴けり

相席の人に本音や花見酒

初蝶の行方に高き石の塀

春の夢ロビーにタンゴ踊りけり

俳諧は余生の伴侶春深し

○ 尾野奈津子

飛鳥仏の謎めく笑みや春の凍て

花万朶目つむりてもつむりても

江戸三座のありし面影蝶の昼

気つ風よき下町ことば夏隣

亀鳴くや笑うて終はる後日談

○ 小嶋恵美

逃水やわが青春のビビアン・リー

脇役としての人生春暖炉

行く春を惜しむ八十路のクラス会

ふらここに腰掛けてみる夕ごころ

夕蛙口にやさしき皿のもの

○ 三宅文子

惜春のまつすぐ通る二天門

何となくさうとも聞こゆ亀の鳴く

車止めより花人となりにけり

春惜しむ浅草六区フランス座

浅草に半衿さがす夏はじめ

○ 太田慶子

満開の桜のあはひ空小さし

愉しさや町の桜の番付表

幸せの形それぞれ花むしろ

花冷えや白湯のむに塩ひとつまみ

子の影の母の影追ふ残花かな

○ 青柳雅子

新元号すたとんと胸に梅真白（令和 三句）

連綿とメビウスの帯聖五月

八百万の神も令和の更衣

幾度も同じ問答よなぐもり

花疲ゆつくりすすする熱きもの

# 余言

安立公彦

パルテノン遺跡のエンタシス風薫る 片桐てい女

パルテノンはギリシアの首都アテネに残る神殿。周知の通り、丘陵の上に築かれているこの遺構は、微動だにしない安定感を見る人に与える。エンタシスは円柱のふくらみを指す。法隆寺金堂の柱にもこのエンタシスは見られる。

この句、作者のかつての旅路の一景であろう。遺跡に立つと、パルテノン宮殿が、凜乎とした円柱の列を見せると勝れた遺構は、見る人に嘗ての歴史を物語る。この神殿跡など殊にその思いが深いだろう。「風薫る」が的確だ。

どの風もみな新しく朝ぞくら 近藤 牧男

今年の桜は例年にも増して美麗だった。そういう某日、久しぶりに向島百花園を訪れた。ベンチに腰掛けていると折からの風に桜の大樹が散り始め、花びらに身を包まれているような恍惚のひとつだった。

この句、「みな新しく」が新鮮だ。朝、咲き初めた桜に

吹き来る風は、その桜と同じように、新しいそよぎを連れてくる。「朝ぞくら」の置きも佳い。感覚のみごとさを、充分に感じさせてくれる句である。

逃水の武蔵野遠くなりしかなく 吉澤恵美子

「逃水」を辞書はこう記す。「草原などで遠くに水があるように見え、近づくと逃げてしまふ幻の水。古く武蔵野の名物と伝えられた」。唇気楼の一種と記す。

作者はかつての武蔵野で、この「逃水」に遇ったことがあるのか。一句を読むと、そういう回想の場面が、「武蔵野遠くなりしかなく」から伝わって来る思いがする。それは更に、その回想が単なる逃水の回想でないことも暗示している。逃水も青春も遠く去ったのだ。

畑打の土の香に坐す小屋かな 久保 久子

歳時記を見ると春の農作業として、「耕」、「田打」、「畑打」などがある。とくやくと雪かきませて田打かな一茶の句など、如何にも早春の農耕を見るようだ。

掲出句、「小屋」は「間食」。「土の香に坐す」が、その地の風土を良く表している。余り広くもない畑に、一服する夫婦の農民。その畑は代々の農地だろう、広くはないが、その夫婦とは強い縁で結ばれている。「土の香に坐す」には、

そつういふ思いも感じられてくる。「小昼」が善い。

眼裏のあの日のさくら夫の忌来 久米 憲子

「眼裏のあの日のさくら」は作者個人の経験した景だ。しかしこの句を読むと、一句には、個人を越えた普遍性を感じる。即ち、「句意が分かる」ということだ。多くの俳句の中には、作者にしが理解出来ない表現の句がある。僅か十七文字で一つの場面を表現し、その場面から情感を汲み取るのが俳句だ。そこには事実の存在が欠かせない。この句の「夫の忌来」は、そのことを良く実証している。「夫の忌来」により、「あの日のさくら」が浮上する。

花の兩言葉を選ぶ主治医かな 清水 美子

私たちが生活してゆく上で、欠かすことの出来ない対象は多い。手近な医院（医師）も大事な一つだ。病は時を選ばない。連休中に急病を発する例も多い。

この句の医師は主治医。患者である作者のことは熟知している。それは患者の側から見ても有難いことだ。病状を語る主治医。患者である作者の直向きな表情を見ながら、病の現状をじっくりと話す。まさに「言葉を選ぶ」だ。この「選ぶ」は、言い淀んでいるのではない、好意的発言だ。

なほしやる朝のネクタイ百千鳥 浅木 ノエ

百千鳥、佳い名だ。昔から呼子鳥、稲負鳥（いなおおせどり）とともに、古今集の三鳥として秘伝とされた鳥、とのこと。多くの春の小鳥とも、鶯の異称とも言われる。千鳥は冬の季語。

この句、「なほしやる朝のネクタイ」が全てを語る。その対象は夫君宮崎洋さん。ともに燈下集作家である。「春燈」にはおしどり作家が多い。この句を見て多くの人は、自らの若い頃を思い出すだろう。それは年齢とは関りのないことかも知れないが、百千鳥が声援を送っている。

花散れば穢土も浄土や西行忌 齋藤 晴夫

「西行忌」は旧暦二月十六日。西行には、〈願はくば花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ〉の和歌がある。俳人は、花あれば西行の日とおもふべし 源義と詠む。如月の望月の日の入滅は、西行の願望だった。

この句、穢土は三界六道の苦しみの世界、凡夫の住む娑婆、即ち現世であると辞書は記す。浄土は悪道の無い、阿弥陀の西方浄土を指す。「穢土も浄土や」の中七に、「花散れば」を置いたのが注目される。普通にはこは、「花咲けば」としたい所である。落花の後には花見の喧嘩も無いと言つ、平常心への強い思いの感じられる句である。

# 当月集

安立 公彦選



○ 近藤真啓

草餅やずしりと重き小銭入

提灯に老舗の屋号花ふぶき

花葎やしばし頭を休ませむ

木洩れ日に輝くティアラ五月来る

エジソンを越ゆる発想夏つばめ

○ 中澤弘

雨去りし大樹の末や柿若葉

薔薇の香に沈む散策朝まだき

暁の路地の香ほのと牡丹咲く

紫陽花や掃除したての井戸ポンプ

紫陽花や赤子目覚むる大あくび

○ 佐藤まさ子

町角の珈琲店やミモザ咲く

しばらくは草におぼるる紋白蝶

公園を走るランナー山法師

緑さす令和元年祝ひけり

新元号皐月の空の晴れわたり

○ 横山さくら

踏みしむる草の強さや夏来る

ハンカチを揃へて畳む小さな手

新しき急須と共に新茶買ふ

誂へのスーツの傍の薔薇かな

両の手で位置確かむる夏帽子

○ 山浦紀子

春の風邪歯車の透くオルゴール

花冷えや前足たたみ寝入る犬

春雷や「トムとジェリー」の鬼ごっこ

荷風忌や看板残る大黒屋

行く春やハヤシライスは母の味

# 春燈の句

安立 公彦選

九品仏つたひの溪や春落葉

東京 小林 文良

薦若葉堰にもがくや魚の影

踏み替ふる四肢ただならぬ春の駒

十返りてふ花の松佳き令和かな(小出影向の松)

長椅子の発条の弛みや桜餅

東京 農野憲一郎

春眠や家事の音みな妻の音

山気なほ身より離れぬ夏炉かな

なみの痕残る支流や岩魚痩せ

連れられて川縁をゆく母子草

ひさびさに川辺をゆくや風薫る

新緑や命もらひし悦びを

平成の終の川辺や夜の新樹

長老と呼ぶる日々や花疲

目つづれば浮かぶ故山や麦の秋

神奈川 新海 英二

青嵐ふと口ずさむ海ゆかば

卒寿越えなほ未知の老い更衣

野遊の思ひ出辿る峠茶屋

蛤のささやき合うて海を恋ふ

飴さざむ音小気味好く風光る

指先に明日をふれぬて緑摘む

母徳ぶ日暮むらさき桐の花

舳斗雲に乗りたき雲雀揚がりけり

花終ふる牡丹に安堵お礼肥

平和なる世へ改元の風薫る

街路樹をふくよかにして初夏の風

美容院出て初夏の光浴ぶ

雨止みし朝の小径や風青し

いにしへの香りほのかに余花の雨

福井 西本 花音

広島 浅田セツ子

埼玉 大谷満智子

